



# 合併の成果期待

桑野 巍

「どこに行ってみたくって。僕は若い時米国に留学していたからもう米大陸は結構。元気であれば自動二輪で豪州を一周、大自然に触れたい」(製薬会社元役員)。もう一人の友人は「北米、西欧は一回りしたので東欧諸国を回りたい。アフリカも魅力はあるが遠過ぎて…」(元東京都幹部職員)という。二人ともリッチで海外指向が強かった。しかし彼らからはその後「夢を実現した」という連絡はまだ届いていない。

その時彼らから「お前はどうか」と聞かれたので「俺は鉄道とバスで日本国内の市町村を全部回ってみたい」と答えたら、二人とも「それは無理無理」と笑った。その当時国内の市町村数は3,232もあり、1日5ヵ所回るとしても6年以上かかる。しかし、私のこの夢は時間と労力不足、熱意のなさで実現不可能、いま諦めの境地になってしまった。

現実に戻ると平成の市町村合併も一段落したようだが、新市誕生や町村合併の小さな新聞記事を見るごとに「もう記憶できない」信号が点灯する。数字の上では1,820市町村に再編されたというが、地図と照らし合わせる綿密さも失ってしまった。子供のころから地図好きだったが、といていま本屋の店頭に出回っている日本地図を買い求める気がしない。いずれ大合併の幕が降りたら新日本地図が出回るだろうから、その時買い求めても遅くはなからうと思うようになったのだ。

市町村合併はそれぞれの地方自治体に各種の事情があって、合併がすんなり成就したり、住民や議会の反対などで合併に至らなかつたりで、事情実情様々だが合併問題に注いだ関係者のエネルギー放出には頭が下がる。合併劇を傍観している無責任者から横見していると、関係者の底力を讃えずにはいられないのである。その馬力に感心したのだ。

ただ、感傷的にならざるを得なかった面もあった。それは当事者たちの村が消えたしまったことだ。懐かしい村の名がもう戻ってこないのは淋しいこと、小さな故郷でも故郷は故郷、呼び名は記憶していても住居表示が変わるのは何となくせつない思いだろ

う。兵庫、香川など9県は村が一つもなかったが、今回の合併で村が無くなったのは13県となり、なんだか淋しい思いだ。過疎化、高齢化などあらゆる環境、条件から村が自立するのが難しい時代に入った証なのだろうか。

ついセンチメンタル面や気懸かりな思いが持ち上がってしまうが、合併再編後の問題点が数多いのも事実だ。元の役場の建物の活用法はあるのか、これが新しいハコ物にならないか、廃屋になりはしないか、維持管理費が高張<sup>かさば</sup>らないか。ある意味の負の遺産をかかえることを心配する。

元役場が支所となるケースも多いようだが、本庁と支所との距離が10キロ、20キロメートルと遠ければ巡回や決裁などが不便をきたすことになりはしないか。また、本当の行財政改革という観点から「小さい政府の再設」は出来るのか、議会や議員数の問題、住民の意識改革は可能なのかが試されるだろう。

合併の狙いの一つには行財政の効率化があったはずだが、行財政改革にも限界というものがあるし、現実は何の自治体も台所は火の車だ。「首長をはじめ職員や議会議員の腕の見せ所はこれから」とみて、合併の成果を期待したい。

この先は合併問題に直接関係しないとしても「福祉と負担」「行政サービスの中身充実」を真剣に考えなければならない時代に向かう。高福祉にはそれなりの高負担が伴うのに、住民の多くは「高福祉低負担」を望むのだから、そこには想像以上の軋轢<sup>あつれき</sup>が生ずることは必至だろう。自治体はどんな知恵を出せばよいのか、住民はどんな我慢ができるのかの難題が横たわり、新自治時代が正念場を迎えるだろう。

市町村合併の次に待ち構えているのは道州制論議だ。現在の都道府県知事や議会がその枠組を自ら棄てるとは思わないが、政府の地方制度調査会は道州制導入を打ち出した。まだ国民的議論を呼び起こすまでには時間がかかるだろうが、ある意味では「国のかたち」を変えることになろうから慎重を望みたい。

(自治大阪編集委員会顧問  
時事通信社元大阪支社長)